



NCC 日本キリスト教協議会

〒135-0016 東京都江東区東陽 2-3-1 イトーピア東陽町 216 振替 00180-4-75788
TEL : 03-6666-8760 FAX : 03-6666-8766
E-mail : general@ncc-j.org http://ncc-j.org

NATIONAL CHRISTIAN COUNCIL IN JAPAN

2-3-1-216 Toyo, Koto-ku, Tokyo, 135-0016 JAPAN
Phone : 81-3-6666-8760 Fax : 81-3-6666-8766
E-mail : general@ncc-j.org http://ncc-j.org

敗戦70年にあたって、日本キリスト教協議会（NCC）議長談話

暑い夏の日差しの中で国会に向かって「武力で平和はつくれない」と叫び続ける多くの人々の声の中から、主イエスの御声が心に響いてきます。敗戦70年を迎えた私たちに対する歴史の支配者のみ言葉です。

イエスはその都のために泣いて、言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら…。しかし今は、それがお前には見えない。」（ルカによる福音書19章41～42節）

「ローマの平和」は武力による平和でした。人々はその武力に屈し、頼り、わが身の安全と豊かさを追求していました。それに反発する者も武力によって対抗しようとしていました。しかしイエスが告げる「平和への道」はこれら全てとは全く正反対です。

わたしはエフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる。（ゼカリヤ書9章10節）

これが子ロバに乗る王としてイエスが体現した「平和への道」です。しかし数百年も前に告げられたこの神の御言葉を、イスラエルの指導者は信頼せず、従おうとはしなかった。自国の武力が弱ければ、より強い武力を持つ国に頼り、同盟して自らを守ろうとして来たのです。

彼らは謀を立てるが、わたしによるのではない。盟約の杯を交わすが、わたしの霊によるのではない。こうして、罪に罪を重ねている。～彼らは、戦車の数が多く、騎兵の数がおびただしいことを頼りとし、しかしエジプト人は人であって、神ではない。その馬は肉なるものに過ぎず、霊ではない。主が御手を伸ばされると助けを与える者はつまずき、助けを受けている者は倒れ、皆共に滅びる。（イザヤ書30章1節、31章1～3節）

武力に頼る平和、武力による平和は、歴史の主の意志に逆らい「罪に罪を重ねる」ことであり、み言葉通り、結局同盟国と「共に滅びる」結果となりました。このような歴史を踏まえて、主は十字架を前にしてあらためてこう言われたのです。

剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。（マタイによる福音書26章52節）

ですから、武力に頼るな・用いるなど言うこのイエスのみ言葉は、単なる理想でも、願望でもありません。罪の歴史を見通された歴史の支配者の警告です。しかし人類はその後二千年間、この警告に本気で聴き従おうとはせず、ついに核兵器さえ作り出してしまいました。

主は、国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。 (イザヤ書2章4節)

二回の世界大戦を経験し、二個造った核兵器を早速使った人類は、漸く「皆共に滅びる」ことを実感し、国際連合の玄関にこの聖書のみ言葉を掲げて、これからの世界の基本方針としました。そしてこの基本方針は、様々な人間的な思惑によってではあるが、日本国憲法に結実し、核兵器の唯一の犠牲となった日本は「平和への道」を世界に身をもって示す使命を持ちました。

①日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

②前項の目的を達成するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。 (日本国憲法第9条)

だが武力に頼る人間の根深い罪は更に深まり、核兵器は積み重なり、冷戦が終わっても武力による「アメリカの平和」が世界を支配しようとし、その圧力によって「保持しない」とした武力を日本も持つことになり、住民の安全と人権を犠牲にしてまで軍事基地を提供し続けてきました。

そして今、日本政府は世界各地で武力による反抗を受けて破綻しかかっている「アメリカの平和」を自らの武力で支えようとし、殊更に自国に対する脅威を言い立て、「安全保障」と称して、憲法が否定している戦争と滅びへの道に国民を強引に引きずり込もうとしています。

日本国民は①戦争によって自ら体験した悲惨と、②自分たちをだまし、束縛して戦争に引きずり込んだ「軍国主義」を憎み、憲法の基本である「平和と民主主義」を心から歓迎しました。今に至るまでその基本姿勢は変わらず、平和を願う力となっています。

だが③自分たちのかつての戦争が、多くのアジアの人々を殺し苦しめた罪についてどこまで真剣に悔い改めたでしょうか。自らの身にふりかかった戦災・戦死と軍部の横暴は語り伝えられても、アジアの人々を殺し苦しめたことを具体的に語り伝えることはあまりにも少なかった。それさえ今、極力隠し、否定されようとしています。ここに「平和への道が見えない」根本原因があるのです。

今私たちに主から示されているのは、近隣諸国に戦争の罪を真実に認めて謝罪し、歴史の支配者である主に対して罪を悔い改め、近隣諸国の「隣人となる」道です。諸国に圧力をかけて自分の「隣人にする」のではなく、まず自らが進んで諸国の「隣人となる」ことに力を注ぐのです。

旅をしていたあるサマリヤ人は、そばに来るとその人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、・・・「だれが・・・隣人になったと思うか。」、・・・「行って、あなたも同じようにしなさい。」 (ルカによる福音書10章33～37節)

よく知られたこのたとえ話でイエスはなぜ主人公をサマリヤ人にしたのでしょうか。ユダヤ人とサマリヤ人の間に歴史上積み重なった「隔ての中垣」があったからです。イエスご自身、ユダヤ人としてサマリヤ人からそれを体験しました。

「ユダヤ人のあなたがサマリヤの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」

(ヨハネによる福音書4章9節)

サマリヤ人の村に入った。しかし、村人はイエスを歓迎しなかった。イエスがエルサレムを目指して進んでおられたからである。

(ルカによる福音書9章52～53節)

しかしイエスはこれらの「隔ての中垣」を理由に「隣人愛」の範囲を限定しようとする者たちに対して、むしろそれを自分の方から突き破って「相手の隣人となる」ことを命じておられるのです。それが主のみ心(律法)であり、旧約以来命じられている「平和への道」だからです。

主こそ～人を偏り見ず、～孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる。
あなたたちは寄留者を愛しなさい。

(申命記10章17～19節)

寄留者があなたの土地に共に住んでいるなら、彼を虐げてはならない。あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。

(レビ記19章33～34節)

平和が実現しないのは、力と富が偏っているからです。それによって人間や民族や国に対する価値評価までが偏り、「隔ての中垣」となっています。まず社会の中で力と富を持たない者の権利を守り、国籍や民族の違いを自分から突き破って「隣人となる」ことを国の基本姿勢にすることで

軍備と戦争に費やす力と富のほんの一部を用いれば、それは実現します。世界規模で軍備を廃棄して得られる力と富を、自国の市場と資源の確保のためではなく、その地の人々の生活のために用いれば、世界全体の真の平和が実現します。それが主が導く「平和への道」なのです。

しかし私たち人間はそのような「平和への道」を信じることも、実行することも容易にはできません。自分の安全も自分の富も自分の名誉も自分で確保したいからです。それが罪だとは思えず、安全保障のためだと煽られれば、ナショナリズムに足を掬われかねない。だから平和をつくれぬ。

民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震が起こる。～不法がはびこるので、多くの人の愛が冷える。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。(マタイ福音書24章7～13節)

あまりにも平和への道が困難なので、多くの人の愛が冷える。「隣人となる」愛も、「平和への」愛も冷えてしまい、これが現実なのだ諦めてしまう。しかし最後まで堪え忍ぶ者、主を信頼して希望を失わず、その御言葉に聴き従う者は、「平和を実現する人々」として「神の子と呼ばれる」。

(マタイによる福音書5章9節)

神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。(マルコ福音書1章15節)

自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。(マタイ福音書16章24節)

もしこの人たちが黙れば、石が叫び出す。(ルカ福音書19章40節)

最後まで叫び続ける石になりましょう。

2015年 8月 7日

日本キリスト教協議会 議長 小橋孝一